君、真夜中の橋を渡れ。（第２部）

15(jyugo)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君、真夜中の橋を渡れ。（第２部）

【Ｎコード】
Ｎ３９７１Ｘ

【作者名】
１５（ｊｙｕｇｏ）

【あらすじ】
まず、『君、真夜中の橋を渡れ』の第１部を大勢の方の読んで頂き感謝します。
また、沢山の助言も頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。
ありがとうございました。
第２部もよろしくお願いします。　２０１１．１０．０８　１５（ｊｙｕｇｏ）。。。

疑問を持ったままで、高校に進んだ「秀才の伊藤治」

治本人は自分では普通の高校生のつもりだが、周りは違う目で見る。

積極的に周りと付き合えない治を周りは、

「生意気だ」とか「増長している」とか、、

中には「馬鹿にしている」等と全くの被害妄想的な人まで出てくる。

子供から見た、真と嘘、欲望と行動。

大人の吐く、言葉と責任、教えと現実。

その食い違いに揺れる、多感なそれでいて無垢な高校生の心。

矛盾

紫陽花の花が昨夜からの細い雨に濡れて綺麗な花を咲かせていた。
治の住むこの島には、紫陽花が群生している所がここかしこにあり、一面「青の世界」になる。
その頃の海は、逆に青さを失う。
どちらかと言うと「緑」に近い海の色になってしまう。

霧雨が降る、月曜の朝。
治が教室に入ると、後ろの方で数人集まり、言い合いをしている、教室の中は騒然としている、治は別に気にもせずに自分の机に座った。

その治のすぐ横で、言い合いは続いていた。

態度が悪いとか悪くないとかで言い合いになったみたいだ。

「せからしかね、外でせんね」と治はその集まりに向かって言った。

中学までなら治のこの一言で殆どの喧嘩は収まった、しかし今は収まらなかった。
収まるどころか片方の男子生徒が「なんて」と治を巻き込む。
無視して外を見ているとその男子生徒は治の横に来て

「なんち、言うたとや」と興奮して大声で言う。

治が黙っているとその生徒は治の肩を掴んで

「こっちば向かんか」と引っ張ろうとした、
次の瞬間その男子生徒は鞄で顔を正面から嫌と言うほど打ち付けられ、
短い呻き声を上げてその場でしゃがみ込んだ。
しゃがみ込んで口と鼻を押さえてる男子生徒の頭を、
治は思いっきり横から蹴り飛ばした。
「ガシャーン」と大きな音共に男子生徒は机にぶつかり
今度は頭を押さえて呻き声を上げる。
なおも治はその男子生徒の横腹を力いっぱいに蹴り上げる。
男子生徒は完全にその場に蹲ってしまう、瞬く間の出来事。

そうしておいて「せからしかけん、外でせんねち言うたろ」と何事も無かったの如く治は言った。
男子生徒は蹲って呻き声を上げている。教室は静まり返った。

この頃の治は先生にもクラスの仲間にも、絶えず妖艶としていた。
元来明るく話す方では無かったが、ここまでひどくも無かった。

中間テスト前までは少しは話す事も有ったけど、テスト後はそれも無くなり
今は一日中黙って外を見ている。
授業中など挨拶の時に席すら立たなくなっていた。

クラスの男子生徒などは中間テストで学年一位だったから「増長している」と感じた者もいて、
今横で蹲って呻き声を上げてる男子生徒も治に対してそう感じていた一人だろう。

治自身は、自分は何も変わっていない、ただ周りが変わっただけだ

と思っていた。

治は自分が天才や秀才と呼ばれているのは知っていた。
そう言われ出したのは、中学3年の冬ぐらいから。
高校に入ってからも、そう言われる事はますます多くなってしまう。
だが治は自分が天才とも秀才とも思っていなかった、

確かに数学は好きで、家に帰ると数学の問題集ばかりを見ていた、
治にしてみれば、小学5年生で数学が面白くなって
帰るとすぐに問題集を眺める、毎日5時間は眺めてる、
それを小学校6年までの2年間ほぼ毎日。

最初は全く分からなくてただただ眺めていた、
そのうちパズル遊びと同じで、例問題と同じように組み合わせて解くと
答えが出た。

それが面白くてまた同じようにやる、それの繰り返しを毎日やっているうちに
気が付くと解けていた。

治自身の気持ちは、

「あれだけ毎日やれば誰でもできる」そう本心から思っていた。

だから、天才とか秀才とか言われることが嫌だった。
そう言われる度に、からかわれているような気持になる、

小学校の頃、先生からよくこう言われた

「やれば誰でもできる」

その通りだと治は小学校を卒業するころに感じて

「自分が数学が分かるのはやったからだ」としか思っていなかった。

それなのに先生達は「凄い」とか「天才」とか言う。

勿論小学校からの友達もよくそれは言っていた、それは治自身腹立たしく思わなかった。

何故なら、彼らは治が、遊ぶ時間も削って問題集を見ている姿を知っていて、

その「努力」を認めたうえで、「天才」等と言うからだ。

高校に入って自分の事をまったく知らない人に「凄い」とか「秀才」とか言われると、

無性に腹が立った。

ただ沢山の時間をかけてやっただけなのに。

これがもしも、自分より頭の良い奴がやったらもっと良くなるのに。

自分は馬鹿だからここまでしか出来なかったしあんなに時間がかかってしまった。

と本心から思っていたから、その言葉を聞くたびに馬鹿にされてる

気がしたのだった。

先生などは「やれば誰でも出来る」と言いながら治を特別扱いする。

「やれば誰でも出来る」なら「出来て当たり前」と言うべきじゃないか、

それなのに、実際は違う。

だから、治は先生がそう言った言葉を吐いた瞬間に「いらいら」してしまっていた。

いつもは、偉そうに、嘘をつくなとか努力は大切だ等と言いながら、途中に嘘が有っても、結果が良ければそれは問わない。

結果が良ければ、途中の努力は気にしない。

結局は結果しか見えてない

そんな奴らを「先生」と呼ぶ気にはなれなかった。

高校一年生の治は

周りの大人たちの「矛盾」に対して疑問を感じていた。

それはそれで良いのだが、その大人たちは、

今横で蹲って呻き声を上げてる男子生徒みたいに、自分に対してまとわり付いてくる。

自分に対して無関係ならば、何も思わないが、

自分に対して、あれこれ「言葉を投げつけてくる」

大人たちは「嘘をつき、そのまた嘘を言い訳しながら」その上「怒

鳴る」
たまには「手」まで出してくる。
横の男子生徒みたいに「攻撃」しないのは、治の最低限の先生に対する「礼」であった。
初日の吉野など、その「礼」の心が無ければ、
辞書で殴られた瞬間に、躊躇なく股間を蹴りあげていただろう。
逆に横の男子生徒も吉野もそうだが、全くの無防備で「攻撃」してくる、
なんともアホな奴らだ

「やるなら、喋らずにやれよ」

攻撃しようとしている「相手の情報」をまったく知らずに
無防備に攻めてくる、「奴ら」がどうしようもなく治には愚かに思えた。
もしもその相手が、武器を持ってたらどうするんだ、喋る事無く先に仕掛けてきたらどうするんだ。
それが分かっていても、悠長に「怒鳴っているのか」
先生も全く同じで、
「相手の事を深く知ろうともしないで自分の都合のいい過去ばかりを知ろうとする」

「興味のない過去や、何故そうなったのかの過去は探ろうともしない」

それで、一人の生徒を「己」の掌に載せたと勘違いする。

「褒めて、賺して、恫喝」すれば事足りると「奴ら」は思っているらしい。

治は奴らを「軽蔑」していた。

顔を見るのも声を聞くのさえも、嫌になっていた。

責任（指導放棄）

その日の授業が始まった。

1時間目の数学は一度も名前を呼ばれる事なく終了。
出席の名前すら呼ばれない。
もうこの頃になるとクラス全員、治が水野に無視されてる事を気にする者はいない。

2時間目古典が始まる。大川先生は大学を出て2年目の若い女の先生であった。
中間テストで、治は学年で唯一の満点を取っていた。

大川先生は治には、まだ普通に接している。

しかし、、その日事件が起きてしまった。

大川先生は、いつもの様に授業中に古文の現代訳をある生徒に指名した、
指名された生徒は、多分古文を苦手としている生徒だったのだろう、、

立ち上がって「・・・・・」何も答えれなかった。

すると、大川先生が。

「前の授業でも教えたでしょう！！一体何度教えればいいの」
「貴方一度で覚えれないの」と激しく叱責した。

確かに前の授業でも今立っているクラスメイトが当てられて、
前回もわからずに大川先生から、丁寧に教えられていた記憶がある。
でもその生徒は今日もまた同じ所を当てられて、分からずにいた。
その男子生徒は
「分かりません、、すみません忘れました」と言う、本当に忘れてるみたいだ。
クラスの全員が、立ち上がって申し訳なさそうに頭を掻いてる男子生徒を見ていた。
大川先生は、思い出しなさいと少し怒りを込めて言う。
「・・・」
「貴方授業うける気あるの、真面目にうける気あるの」
「はい、あります」
「だったら、覚えているでしょう」と半ばヒステリックになって来ている。
「貴方の頭っていったい何が入ってるの、この前の授業の事よ」
「勉強する気が無いのなら、出て行って」とまで言い出す始末。
治は聞いていて苛立って来た。
抑えきれずに、、「先生」と声を出した。クラス全員が治を見る。

大川先生も声の方向を見る。

座ったままで治が

「先生、一度で覚えんば駄目とね」と質問すると。

「何のための授業ですか、教えた事を覚えないと授業にならないでしょう」と答える。

「じゃー先生の仕事ちゃ、なんね」

「皆に教える事です」

「じゃー先生の言ちょる事やおかしかね」

「何がですか」と大川は少し興奮気味に言う。

「教えるとが、仕事ち、言いながら生徒に覚えろち、言いよったい」

「先生ん話ば聞いちょっと、覚えん生徒が悪かごち、聞こゆっとばってん」

大川は治の言っていることが理解できない感じで聞いていた。

「教える先生が、その教える事の結果ば、理解すっ事と言いよるごたっばってん」

大川はいよいよ意味不明になって来て、

「伊藤君は何を言いたいの」と質問した。それに対して治は。

「先生がどんだけ、偉か先生か知らんばってん、先生が一回教えたら誰っでん全部覚えらるっとね」
「先生の授業っちゃ、凄かとねー大学教授んごちゃんね」
「一回教えて、覚えられんやったら、生徒が悪かとやもんね」
大川は少しずつ治の言っていることが分かりだして来た。
「復習をしてちゃんと覚えて来るべきでしょう」
「じゃったら、『私の授業は復習をして来て下さいそうしないと教えれませんから協力してください』っち言うべきじゃなかとね」
「そっば、如何にも自分の教えは間違うちょらん、みたいな言い方じゃなかね」
「1回教えて分からんのなら、もう一回教えれば良かじゃん2回で覚えんなら10回教えれば良かじゃろう」
「教える側ん先生が教える事を放棄してしもて、生徒が悪かち、言うたら先生ちゃ要らんたい」
大川は真っ赤な顔をして
「伊藤君、屁理屈はやめなさい、授業の邪魔です出て行ってください」と言った。
治は黙って教室を出て行った。
何時ものように、教室の前の廊下に腰かけて治は考えていた。

教える側の人間が教えらる側の能力に頼っているような気がしてならなかった。
一度で覚えれるような人間はいないと治は思っていた、だから繰り返しやるものだと信じていた、
自分の数学でもそうだった、何度も何度も繰り返しやっているうちに分かるようになったから。

どんなに良い教え方でも教える側が、何度も教えると言う事を放棄したら
また、教える側が教えられる側の責任にしたら、指導者は必要ない。
そんな事すら、あの大川は気がついていないのか、、

「一体何様のつもりなんだ」

「結局あの大川も、馬鹿なんだ」

結局、治は古文の大川ともぶつかってしまった。

クラス委員長のひろ子は、治が言った事を考えてた。
「教える先生が覚えていない事を生徒のせいにしたら、先生は必要ない」と言う治の言葉に
自分の中で「覚えれるように教えなければ先生ではない」と変化させて妙に納得していた。

しかし、治の態度はどうなんだろうか、あれで良いのだろうか。
治の言っている事はいつも正しく感じる、でも何かが違うような気もする。

何が違うのかは、良く分からないが、あそこまで先生を追い詰める必要があるのか。

「あれじゃ、先生がかわいそう」

そうひろ子は感じてた。
治が先生を虐めてる様に最近感じて来ていたからだ。

古文の時間が終わり、治が教室に入ると。

今朝授業前に、治に蹴り飛ばされた男子生徒が治に声をかけた。

「伊藤、朝は悪かった。ごめんな」

治は男子生徒を見た、その男は少し照れくさそうに治を見て笑った。
「おっこそ、ごめんな大丈夫」と治は少し腫れた顔を見て言った。

彼の名は「岸本誠一」
剣道部で小柄だが運動神経が良く、明るく女子生徒にも人気がある男だった。

誠一は入学した時から、実は治が嫌いだった。
無口であまり喋らないが、何故か存在感があるこの男が好きになれない、

別に生意気な訳でもないし、目立つ訳でもない
しかし、この男の周りからいつも何か問題が起きる。
その問題もいつも決まって、こいつが言っている事の方が正しいと

思う。

でも、この男の態度が嫌いだった、いつも落ち着き払って、平然とした顔をして。
先生に対してでも、意見を吐く。

今朝でもそうだ、確かに騒いでいた俺が悪い、でも、

「うるさいから外でやれ」と言う言い方を平然と言えるこの男に腹が立った。

腹が立ってつい、絡んでしまった。
そうしたら、こいつは一言もしゃべらずに突然鞄で殴りつけその上2度も蹴る。
全くの躊躇なく目一杯蹴る、
普通あれ程きつくは蹴れない。でもこいつはそれが出来た。

誠一は治が怖くなっていた。

しかし、さっきの古文の授業中の治の話を聞いて、
治が他の生徒の代弁をしてくれてるように感じた。

こいつの成績なら、別にわざわざ先生と衝突する必要はないのに、
黙っていても良いのに。
こいつは大川の悪い所を他の生徒に代わって言ってくれた。

「こいつ、良い奴だなぁー」

そう感じて、今朝の事も自分が悪い事に気が付いた、気が付いたから謝った。
そうしたら、この男は「自分こそごめんな」と素直に言ってくれ「大丈夫か」とも言う。

誠一はその時治が少し笑ったように感じた。

治の笑顔を初めて見た、そして思う「やっぱりこいつ良い奴だ」

しかし、クラス委員のひろ子がこいつを好きなのが、まだ許せなかった。

誠一は中学時代からひろ子の事が好きだったのだ。

どちらにしても、治の理解者がまた一人増えた。

喧嘩して仲良くなって行く。

治も誠一も高校生活を謳歌していた。

紺碧

「15起きんね、学校遅れるばい」

と言うヒロちんの声で目が覚めた。

8畳の部屋で二人は窓際に並んだ二つの机を挟んで、部屋の両端の壁際に離れて寝ている。

朝は毎日ヒロちんが先に起きて治を起こす。

1階に降りて、ちゃぶ台に置いてある、青いハエ避け用の「網」を持ち上げると、

二人用の朝ごはんと、弁当がいつも用意されてある。

下宿のおばちゃんは野良仕事か、港に行って水揚げの手伝いかは、分からないが。

二人が起き出す頃に、家に居る事は少なかった。

毎日、朝は決まって、ご飯、味噌汁、刺身、それに横の畑で採れた「何か」の煮つけだった。

治が2階で二人分の布団を畳んでいる間に。

ヒロちんは下で、ご飯を茶碗山盛りにして準備する、これが二人の暗黙の朝の日課。

朝食を食べていると、ヒロちんが。

「15、今度の土曜日木下んがえに、泊りがけで遊びに行くとばってんが一緒に行かんね」と言う。

「うん、よかよ」

２組の木下はヒロちんの高校での初めての友達で、下宿にも何度も遊びに来てたから、治も仲は良かった。

木下の家は、高校から二つほど山を越えた小さな港町、山道を歩くと二時間はかかる、バスで行っても山を迂回するから1時間以上はかかってしまう。

「バス代ん勿体なかね、歩こか」と言う事で、二人は歩いて行く事にした。

土曜日、下宿で昼ご飯を食べて、２人は私服で下宿を出る。
下宿裏の小さい畑や田んぼの畦道を治が先頭で歩く、いくつかの段々畑の横を抜けて
二人とも一度も行った事の無い「村」を目指して、方向だけを頼りに細い山道に入って行く。

山道と言うより「獣道」と言った方が良い道で、草が少ない所を選び歩いて行く。
一つ目の山を越えて、二つ目の山にかかる所に、小さな沢が有った。
二人はそこで少し休憩することにした、沢の水を二人して腹いっぱい飲み、近くの岩に腰かけてタバコを吸う。

梅雨明けが近いのか、夏の匂いのする太陽の日射しが二人の居る森に降り注ぎ
沢の水面に反射してキラキラと光りを放つ。その光が木々の葉にも反射して森の中までキラキラ光る。

ヒロちんが何も言わずに藪の中に入って行き、右手に「細い草」と左手には何か握って出て来た。
治の前に立つと、その「細い草」と手に握った「赤い実」を差し出

した。

細い草は名前は知らないが、草の茎の所を裂くと、白い綿のようなものが出てくるそれを食べるのだ、
味は全くしないが腹の足しにはなる、誰に教えられた訳ではないが、子供の頃から山遊びをするときはいつも食べていた。

「赤い実」の方は子供達は「蛇イチゴ」と呼んでいた、
野生のイチゴの一種であろう、この季節になると山には大量に有った。

「蛇イチゴ」には食べれるのと食べれないのが有った、
小さな粒が集まって一つの実になっているが、
その小さな粒が大きくて半透明の実は食べれるが。
実の中の粒が小さくて、赤色で、びっしり詰まって硬い実のイチゴは食べれないのである。

高校に入る前は、学校の行き帰りに村の子供達は「蛇イチゴ」を喜んで食べる、
味は、決して美味しいものではないが、子供には「嬉しい御馳走」だ、
通学路から手を伸ばせば大量に手に入った、だから大量に食べる。
すると、口の中は真っ赤になる、勿論唇も、舌も真っ赤になる。
真っ赤なままで学校に行くと、皆真っ赤な唇をしていた。

小学生ぐらいだと、真っ赤な舌を出して、「蛇ばいーーー」って遊ぶ。
おそらくそこから「蛇イチゴ」と言う名前になったのだと思う。

桑の実などは食べすぎると真っ青になる、子供たちはそれを楽しん

だ。

その他山に行くと色々なものが食べれる、
そんな事など2人はもちろん、田舎の子供ならだれでも知っている。

二人は、しばらく休憩してまた歩き出す。

二人とも道も知らない初めての山だが、そんなことは何も気にしない。
適当に歩けば行けると思っているから、二人は子供の頃からよく山に行った。

小学5年生の頃に二人で、「グミの実」を取りに深い山に入り迷ってしまった事が有る、
大きな米袋持って、「グミの実」を探して山に入って行く、夢中になって探しているうちに
全く知らない山に迷い込んでしまった。

でも二人は「迷子になった」と言う思いは無く、適当に山を下りだした。
しかし、降りたと思ったらまた山がある、仕方ないのでまた登るそしてまた下る、
そんなことを繰り返しているうちに周りは真っ暗になってきた。
二人はさすがに不安になって来る、不安を打ち消すために二人で大声で歌を歌って歩く。
長い時間かけて、やっと道路に出る事が出来た、全く見覚えのない道路だった。

周りは既に真っ暗、取りあえず二人は一安心して、道路沿いに歩き出す。

勿論車など通るはずもない。
その頃二人の住む村に車は、プロパンガス屋さんのトラックが一台有るだけ、それとオートバイが数台。
どこの村でも大差はない。
だから、車が通る事の方が奇跡だった。

その時はるか向こうに、灯りが見える。微かだがエンジンの音も聞こえてきた。
二人の前方から近づいて来て、最後のカーブを曲がるライトの灯りが二人には眩しい。
その灯りが二人の横で停まった、オートバイだった。

「うんどんや、何んばしよっと」「どこん子か」

村の名前を言うと、驚いた様子で、歩いて行くのかと聞く。
そのオートバイの大人が言うにはここから歩くと2時間はかかるらしい。

結局オートバイの人が二人を村まで送ってくれた。

治もヒロちんも初めてオートバイに乗った、
手には米袋一杯の「グミの実」を持って二人して後ろの鉄製の荷台に必死でしがみつく。

村の入り口の三叉路の所まで来ると大人が数人いて、手に懐中電気を持って歩いてる。

オートバイの大人は
「ここで、良かとやろ」と言って二人を降ろすと今来た道を引き返していった。

懐中電気を持った数人の大人が近づいて来て。

「ヒロか」と声をかけてきた「うん」とヒロちんが答えると。

「こん馬鹿が！何ばしょったとか！もう一人や治か！」と大声で怒鳴る。

二人がキョトンとしていると、もう一人の大人が

「まぁー良かたい無事やったけん」

怒鳴りつけた大人が「帰っぞ！！」と二人の頭を小突きながら言う。

村に入ると、治の家の前に大勢の大人が手に手に懐中電気を持って集まっていた。

頭を小突いた大人が「おったぞーーーー」と叫ぶと

その大人たちの中から、3人の影が走り寄って来た、

治の父親と母親、ヒロちんの父親だった。

二人は瞬間的に「怒られる」と感じて、身構える、

案の定二人はこっぴどく殴りつけられてしまう。

大人たちは二人が日が暮れても帰ってこないものだから、心配して山狩りをしていたらしい。

その日二人は顔をパンパンに張らすほど殴られた。

そこまでして二人が採って来た「グミの実」は大人たちが「果実酒」を作るのに無事使われた。

二人はそんな思い出話しをしながら、山を登った。

歩き出してから約2時間思ったよりも時間が掛かったが、小さな峠を超えると海が見えた。

この島の海は、治たちの住んでいる本土側の海と、今目の前にある外海側の海とでは多分海流の違いなのか、二つの様相は全く違う。

眼下に広がる海は、治たちの海の「薄緑色の青」とは違う「紺碧の海」

二人が目指す小さな入り江の少し沖合まで深い青色で、それが突然薄い青に変わりそれからは徐々に青が薄くなり海岸近くになると限りなく透明な青になっていた。

浜は砂浜ではなく、玉石の浜になっていた。

治は玉石の浜は、歩き難いし泳ぎ辛いから嫌いだった、それに海にの中も魚は居るが群れを成してる魚が多かった。

この群れを成してる魚は、泳ぎが早くモリで突くのが難しい。

海底まで玉石だからサザエやアワビと言ったのも、極端に少ない。

その代わりと言っては何だが、棘の長い「うに」の仲間が「うようよ」いる、こいつらは難儀なもので

うかつに足を置いたりしたらそれこそ大変だ、細い棘が足の裏一面に刺さって折れる。

それも激痛を伴ってだ、そうなると浜に上がって周りの男の子たちに「小便」をかけてもらう、その後家に帰って刺さった棘を根気よく抜くそうしないといつまでも痛みが引かないからだ。

海で棘を持った魚やクラゲに刺された時などは決まって小便をかける。
小さいころは意味も分からずにそうしていたし、そうしなければいけないものだと信じていた。

今眼下に広がる「紺碧の海」は二人が目指す村の入り江から広がり遥か遠くの水平線までつながっている、
水平線の向こうには何があるのか、子供の頃には何も考えなかったが高校生の二人は知っていた。

治は子供の頃この海で見た「白い優雅な船」の船乗りになりたいと考えていた。

入り江の縁に集落が見える、そこが木下の住む村だ、２人はしばらく海を眺めた後最後の峠を下って行く。

明るい太陽の光で、海が光っていた。

集落（隠れキリシタン）

約3時間かけて目的の村に着いた。

山道を出ると、道の向こう側はすぐ海。
左側を見ると右側に曲がっていてそれに合わせるように海が広がっている。
二人は左側に歩いて行った。

カーブを曲がると目的地の集落が有った、二人の村と、さほど変わらない村である。

峠から見えた玉石の浜の周りに古い民家が数十件程寄り添うように建っていて、
家と家の間には小さな畑が有り、それぞれの家が小さい道で繋がっている。
その小さな道は迷路のように曲がりくねり、最後は海岸沿いの大きな道に出る。
その大きな道の向こうは、玉石の浜だ。

浜には小さな小舟が陸揚げされていて、その小舟の日陰で大人たちが座り込み網の修理をしている。

この島のどこにでもある風景。

村の入り口で小さな子供3人を発見。
ヒロちんが「木下んがえ、やどこかー」と聞くと。

「うんや、だっね？」と逆に聞いてくる、ヒロちんが
「友達ばい」とそれに答える
「まさ兄ちゃんがえ？」と言ってくる
木下の名前は「雅史」であるから、子供たちの認識は間違っていない。
「うんそうばい、知っちょっね」
「知っとーよ」
「どこね」
結局その3人に家まで案内してもらう事になった。
木下の家は、二人の家と大差ない「家」だった、2階建てで横が畑、玄関先には、網だとか鍬や肥料の袋などが無造作に置かれてその先に細い土間が有り、
土間のすぐ左横の部屋には仏壇が見える。
土間の正面には暗い台所が有り、その右横に2階に上がる階段が有った。
「まさ兄ちゃーん、だっかきちょっよーー」と子供たちが階段の所まで入って行って2階に向かって叫んでくれた。
「おお」と言いながら木下が下がって来て、子供たちに「ありがとな」と言うと、
子供たちは元気に外に出て走り去ってしまった。
「遅かったとね、上がれよ」と二人を2階の自分の部屋に案内した。

部屋に上がると、治もヒロちんもすぐにタバコに火を点けて横になってしまう、
「きつかったろう」
自分もタバコを吸いながら、木下は言う。
結局3人共そのまま寝てしまった。
「まさ、飯ばい」と言う声で目が覚めると、階段の所に木下の母親が立っていた。
「よーきたねー何んも無かばってん、食べんね」と言いながら。畳の上にお盆を置いた。
お盆の上には、沢山のご馳走が所狭しと並んでいた。
木下の村は「隠れキリシタン」の村だった。
「天草の乱」の後長崎ではいよいよキリスト教徒の弾圧が激しくなっていく、
中心人物などは激しい弾圧を受け数多くの尊い命が奪われてた。
その中で、信者たちは弾圧や、信者狩りから逃れる為に、本土の山岳地や人気のない海岸部に移り住んで行く、
その中にあって、多くの信者たちは海の向こうの小さな離島を選んで移り住む。
離島であっても、先住民は居た、
その先住民たちは比較的、波、風の穏やかな本土側の内海に住んでいたと思われる、
その先住民の目を逃れるように逃げてきた彼らは、波も風も強い外海に住み着いたみたいだ。
だから、今でも隠れキリシタンの末裔の集落は外海が多い、外海独

特の「紺碧の海」厳しい環境が彼らの住まいとなったのだった。
治たちの村は明るいが、彼らの村にはどこかしら「影」がある、それは苦しい隠匿生活の歴史そのものかもしれない。

これもこの地方の歴史だが、キリスト教の弾圧が厳しい中でこの地方に流れ着いた彼らが
密告による「断罪」を受けた、等と言う事は一度として誰にも聞いた事がない。
と言う事は、おそらく先住民と隠れキリシタンの両者はお互い仲良く共存していたと思う。

だから木下の村の様な「外海」の人達は、治たちみたいな「内海」からの来訪者をとても歓迎する。
それはおそらく、先祖代々語り継がれている「感謝」の表れかもしれない。

治はそんな事を考えながら木下の母親を見る

そこには、真っ黒に日焼けした皺だらけの笑顔があった。

「かぁちゃん、もうよかけん。はよ行かんね」と少し恥ずかしのか、木下は目の前に座り込んでしまった母親に言う。

「良かたいね、かぁちゃんも少しおったって」と母親は少し話させろと言う。

ご飯を食べながら、学校の事や、双方の村の事など、たわいのない話をした。

結局木下の母親は3人が食事をする間傍で話をしていた。

「ご馳走様でした」とヒロちんと治が言うと。
「足りたね、足りんやったら台所にあるけん、しいたごと食べんねね」と言ってお盆を持って下がって行った。

食事が終わったのが夕方近く、3人は海岸に出掛けた。

西日を浴びた海が輝いている。陸揚げされている船の上に乗り座り込んでタバコを吸った。
海からの風が心地良い。

巨大な太陽が西の水平線に沈もうとしていた。

オレンジ色の光が村中に広がり、3人の座っている船を包む。

木下は見慣れた景色だが、2人には珍しい。

逆に木下は水平線から登ってくる、小さなそれでいて白く輝く朝日は珍しい。

しばらくして木下が

「おなごば、よぼか」とニヤニヤしながら言う。
それに素早く反応したのはヒロちんだった。

「誰っか、おっとね」と食いつく。
「3組ん、和子がおっよ、2年生も2人おっし」

ヒロちんと木下の話し合いで男女6人でここで飲もう、と言う事で

話はまとまったみたいだ。
早速木下を先頭に女の子の家に向かった。
一件の家の前まで来ると木下は開けっぱなしの玄関に顔だけ突っ込んだ感じで
「和子、和子」と二回叫んだ。
二階の窓が開く音がして、「なんね」と二階から声がする、木下は玄関を出て狭い道路の向こうに行き、声の方を見上げて。
「ちょっこ、出てこんね」と声をかけた。
治は和子と言う1年3組の女子生徒の顔はなんとなく見覚えある程度だったが、
和子は治を知っていたらしくて。
「伊藤君やね、どがんしてここにおっと」と聞いてくる。
「木下んがえ、遊び来たったい」とだけ治は答えた。
木下が後二人の2年生の女子生徒の名前を言って、これから海で遊ぼうと誘う。
和子は快諾して先輩二人は私が連れてくる、そう言って村の奥の方に一人で歩いて行った。
治、ヒロちん、木下の3人の男たちは、木下の家に行って「焼酎」をこっそり持ち出し。
海岸で待つことにした。
5分ほどして村の向こうから、3人の女が歩いてくるのが見えた。

手には同じように、こっそり持ち出しただろう、焼酎と他の何かを持っている。

「こっちこっち」と木下が3人を呼んだ。

告白

「焼酎と刺身と後適当に持って来たばい」そう言いながら。
3人の女達は治たちがすでに座り込んでいる、船に乗り込んできた。

「あらー伊藤君やろ？」と一人の女子生徒が身を乗り出して治の顔を見て言う。

木下が聞く「治ちゃ、そがんに皆知っちょっとね？」
二人の2年生は顔を見合わせて、クスっと笑った。

6人の男女が車座に座り込み、その真ん中に焼酎の一升瓶が二本と、大きな皿に山盛り積まれた刺身、
新聞紙に包まれた大量の焼いた「あご」それと、湯のみが6個置かれ、
高校生男女6人の「夏の夜の宴会」がスタートした。

恵理子と名乗った2年生の女がふざけて「かんぱーーい」と言って6人共焼酎を口にする、、
全員が湯呑を口にした途端、、

「うえぇ、なんね、こん味は・・」

と和子が手にした湯呑を前に突き出しながら言う、それを見てほかの5人は笑い転げた。

「カズ飲んだ事なかとね」と恵理子が笑いながら聞くと、

和子は湯呑の臭いを嗅ぎながら「なかばい、、こがんうもなかとね」とまた湯呑を前に突き出して大仰に顔をしかめる。
それを見ていた5人は、また大笑いした。

落陽の残り香なのか、さらりとした潮風が笑い声と共に吹いていた。

木下が「15ちゃ、そがんに皆知っちょっとね？」ともう一度聞く。
胸元がはち切れそうな青いTシャツを着た恵理子が
「15？」と今度はあだ名で言った木下に向かって小首をかしげる
「治ん、あだ名たい」
それに納得した恵理子は
「伊藤君がバット持って暴れた教室や、私のクラスやったもん」
「2年生で伊藤君ば知らんもんやおらんと思うばい」とも言う。
どうやら、この恵理子は報復に行った2年2組の生徒らしい。

木下はその事はヒロちんに聞いて知っていたが、詳しくは知らなかった。
治に聞いても笑っているだけで答えてはくれない。

「どがんやったと？」と言うと、恵理子は「すごかったとよ」と目を輝かせて話し出した。
他の4人は興味津々で話を聞いていた。
治だけがタバコに火を点けて船を下りて海岸に向かって歩く、船の方からは、話し声が聞こえるが治に興味はない。

夜の帳が降りだした海は、静かに広がっている。

「１５」とヒロちんの呼ぶ声で、治は船に戻ってまた飲みだした。
和子も顔をしかめながら飲んでいる、二時間程で恵理子が親に内緒で切って来たハマチ一匹分の刺身も殆ど無くなり、二本目の一升瓶が真ん中に置かれていた。
勿論まだ１６、７歳の少年少女、味など分かるはずもなく、ただ背伸びしているだけかも知れない。

皆程よく酔いが回ってきたのか、ヒロちんなどはそのまま寝転んでしまった。

木下と和子は海岸の方に二人で歩いて行った「まさとカズは昔から仲良いからねー」と恵理子が教えてくれた。
ヒロちんは疲れたのか酔っぱらったのか、横で寝息を立てだしている、

治と恵理子ともう一人の2年生の3人は、あごをかじりながらチョビチョビ飲む。
飲みながら話をする、二人の女が気になるのはやはり「報復事件」の事のようで、

「先生には何も言われんやったと？」
「別に何も、言われんやったばい」
「ばれたら、退学やもんね」「退学になったらどがんする気やったとね？」
「別に何も考えちょらんやったよ」と治は答える。

しばらく話た頃にもう一人の友達が、帰って行った。
ヒロちんは本格的に寝てしまっている。
二人っきりになって恵理子が
「私達も歩こうか」と言って先に船を飛び下りた、治もタバコを手

に飛び降りた。
二人は木下と和子が行った逆の小さな堤防に向かって歩き出した。
堤防と言うより小さい船着き場に行くと、１０隻ほどの船が係留されている。
船を繋いでいるロープの残りが暗い足もとに無数に有るので二人は歩きにくい、
堤防の中ほどでロープに足を取られた恵理子が「キャッ」短く叫んで治の腕にしがみつく、
「大丈夫と」「うん、ビックリした」
しがみついた腕を離そうともせずに恵理子は笑った。
腕を組むと言うより腕につかまった状態で堤防の先まで行きそこに座った。

並んで海に足を投げ出し座ると海からの風が気持ち良い。
恵理子が「落ちたら怖そう」と治の腕をつかんだままで海を覗きこむ。
「落ちても、泳げば良かたい」
「下から引っ張られそうで怖かたいね」
「そがん事やなかたい」
「１５や泳いだことあっとね」飲んでいる途中からあだ名で呼びだした恵理子が言う。
「有っよ」
「じゃぁーこれから泳ぐね」恵理子がいたずらっぽく言う。
「いやばい、服もなかとに」そう言った途端に恵理子が治を突き落とそうとする仕草をした。
「やめんねって、ほんなこち落ちゃっくっじゃろ」と治が言うと、恵理子は笑った。
波の音が一定のリズムで聞こえてくる他何も音は無い静かな世界。

沖合にイカ釣り船の明かりが見え、その遥か先の水平線は微かに空と海との境界線の明るさが違う。

「彼女やおらんとね」と唐突に恵理子が聞く。
「おらんばい」
「15ば好きっち言う人や一杯おろうもん」
「そがん事や無かよ」
「今好きな人や？」
治の頭に京子の事が過った。
「別に・・」
「ふーん」
タバコに火を点けて治は寝転んだ、
「今何時ごろやろ？8時ぐらいかな」と恵理子が独り言のように言う。
「家や良かとね」
「うん、今日や誰っもおらんもん」
「母ちゃんや」
「おらんよ」
「どがんして」
「私が子供の頃に死んだっちゃんね」
「そがんか・・」と治は答えてそれ以上は聞かなかった。

実は治も両親を亡くしている。二人して夜、漁に出掛けて帰らぬ人となっていたのである。
一人っ子の治は母親の姉夫婦に引き取られることになった、治が2歳の頃の話だ、勿論治自身に記憶はない。
その事実を知ったのは中学2年生の時。

聞いた時は不思議な事に何も感じなかった、何故なら子供の頃から「おかしい」と感じていたから。

お盆になると、必ず隣村のお墓参りが毎年の事だったし、お墓参りに行くと全く知らない家に顔を出してご飯を食べる、そこのおばぁちゃんが、治の頭をいつも撫でながらお小遣いをくれた。
そこに行く時はいつも母親と治だけ、父親も他の兄弟も行ったことは無い。
母親から事実を知らせれてからは、よく自転車で隣村のおばぁちゃんに会いに行った。
おばぁちゃんはいつも泣きながら喜んでくれていた。
治が高校進学を決めた時も喜んで、頑張って勉強しろと言ってくれた。
誰よりも治の高校生姿を楽しみにしていたのに、中学3年生の冬に死んだ。
治はおばぁちゃんの葬式の時に涙は出なかった、自分にとって唯一の理解者を失った喪失感だけが残る。

そんな事を思い出しながら治は星を見ていた、暗い空には溢れるばかりの星が輝いていた。

「15さぁー私はどがん見えると」と恵理子が突然言う。
「どがんちゃ？」
「いや、、どがんかなぁと思てさ」
「別に、どがんも思わんばってん」
「私15がクラスに来たじゃんね、そん時から好きやったとばってん・・」と言う。
「どがんしてさ？」と聞く。

「どがんしてって、理由はなかばってんさ」
「そうか」
「私の事好かんとね」
「うんにゃそがん事やなかばってん」

「じゃぁ、付き合わんね」
「うん良かよ」
「ほんなこち良かとね」
「うん良かよ」

恵理子は治の横に寝転んで、
「あぁー良かった、断られたら恥ずかしかもんね」と言った。
「私んごちゃっとで、良かと？」
「うん先輩、可愛いかし」
「ほんと？」「うん」

その時浜の方から二人を呼ぶ声がして、２人は戻って行った。途中恵理子が、
「明日昼はなんばすっと？」
「別に決めちょらんよ」
「泳ぎにいこか？」
「うん、良かよ」
「じゃぁー１０時頃に船ん所でね」
「うん」

戻るとヒロちんはまだ寝ていた、ヒロちんを起こして解散した。

木下の家に帰ると布団が３つ敷かれてあって、３人は寝転んだ。時間は９時半。
木下が
「１５、恵理子や、うんが事ばしいちょっとばい」と言う。
「うん、付き合うごてしたよ」それを聞いてヒロちんが飛び上がって、
「ほんなこちね」
「うん」

「よかなぁーおっも彼女んほしかよーー」と叫んだ。

高校生の夜は更けて行った。

蒼海

「まさ！起きんね！」と言う声で3人は目が覚めた。

時計を見ると朝4時半、階下で母親が呼んでる。

木下が「何ねー」と叫ぶと

「父ちゃん帰って来たけん、ちょこっと浜に出んね」

どうも木下の父親が漁から帰って来たみたいであった、

3人で半分寝ながら着替えて一階に行くと、木下の母親が

「まさだけで良かとよ、あんたどんやまだ寝ちょらんね」

それを聞いたヒロちんが

「よかと、手伝うけん」と答えると。

「ほんなこちね、ありがとうね」と言いながら、奥から大きな網の袋を持ってきた。

まだ真っ暗な外に出ると、少しひんやりする、それでいて気持ち良い。

玄関に有った一輪車に、魚を入れる木の箱を5個積んで木下が押す。

ヒロちんと治が、それぞれ3個づつ抱えて浜に出た。

木下の父親の船が昨夜恵理子と話した堤防の所に接岸されて数人の大人が忙しく働いていた。

「おお、まさかそっば箱に並べろ」と大量に積まれた魚の山を指して言う。

3人でそれぞれの種類別に箱に並べて行く、勿論子供の頃からやって居る事だから心得たもので手際よく作業する。

箱入れをしている間大人達は、操舵室やエンジン、機械類の手入れなどをやっている。
箱入れが終わったら、船に乗り込み、先に3メータぐらいの紐の付いたバケツとデッキブラシをそれぞれ持って。

3人はパンツ一枚になって。海水をすくって、甲板にかけてデッキブラシでゴシゴシと船の掃除をする。
大人達は接岸していた船をまっすぐに係留すると、箱詰めされた、魚を軽トラックに載せて漁協のある村に運んでいく。
木下の父親はどうやら近所の人数人で共同で船を持ち漁をしているみたいで、かなり大きな鉄製の船だった。
3人が掃除を終わったらもう既に日が昇っていた。

木下の村の日の出は山から昇ってくる、

山から昇る朝日は水平線から昇る朝日と違って、太陽が山を越えた瞬間に暑くなる。

汗だくになって作業を終わった3人はそのまま船から海に飛び込む。
こうして大人の手伝いをした後は、朝早くから皆で泳ぐ。
小学中学は義務教育であるから本来遊泳期間や時間があるのだが、そんなものを気にする者など誰もいなかった。
勿論、学校側も先生達も黙認である。

夏の朝の透明な海、先に飛び込んだヒロちんの足の先まで見える。
高校生になっても3人共海が大好きであった。

２０分ほど泳いで、服を手にパンツ一枚で3人は村の中を歩いて木下の家に戻る、
途中で村人と会うが、普通に挨拶をする。村人にとってこんな事は

ごく普通の光景であった。

家の裏に回り井戸のポンプで水をくみ上げ交互に水を浴びて濡れたままで裏口から炊事場に入ると
木下の母親が「ご飯ば食べんね」と言いながらタオルを渡す。

身体を拭いて一階の部屋に上がる、父親はまだ帰ってないみたいだ。

食卓を囲んで3人は胡坐をかいて座った。
食卓には、ご飯と味噌汁、それとさっき箱詰めした時に数が少なくて箱に入れなかった様々な種類の魚の刺身が大きな皿に山盛りに積まれている。
3人はパンツ一枚の姿で、話もせずに食べた、食べ終わって二階に上がりタバコを吸う。

「疲れたね、ちょっこ寝よか」とヒロちんが言い横になる、木下も横になるとすぐに寝息を立てだした。
「15や寝んとね」
「おっや、恵理子と泳ぎに行ってくっけん」
寝転んだままでヒロちんが「よかねー」と羨ましそうに言った。
「今日や帰らんと？」とヒロちんが聞くから、治が「今日も泊まろか？」と言って木下を起こした。
半分寝ぼけた木下が「どがんしたと」と眠そうな声で言う「今日も止まって良かね」治が聞く。
「うんよかよ」とだけ言うとまた寝てしまった。

明日の朝は木下と一緒に学校に行って一旦下宿に帰って着替える事にした、下宿のおばちゃんにはヒロちんが後で電話すると言う事でもう一泊が決定。

しばらく二人で話していたがヒロちんも寝てしまった、治も少し眠いが我慢して起きていた、時間は8時半、約束の時間まで後1時間半ある。

治は下着がまだ濡れているのが気になったのと、タバコが無くなりそうだったので服を着て外に出た。
外はもう夏の様相で太陽が容赦なく照りつけている、村で唯一のお店に赤い「たばこ」の看板が軒下にぶら下がっている。
そこでタバコを買って海岸に出た。
約束の船影に治は寝転んだ、玉石が背中に当たりひんやりと気持ち良い。

しばらくして目が覚めると横に恵理子が座っていた。
「おはよ」
「うん」
「朝から手伝いしとったやろ」
「うん」
「うちの、とうちゃんもおったとよ」
どうやら恵理子の父親と木下の父親は一緒の船に乗っているらしい。

「いこか」
立ち上がった恵理子は、白いTシャツに短パン、サンダル姿で手には大きな網のバッグ持っていた。
Tシャツの胸元が治には眩しい、あわてて目をそらして立ち上った。

村の浜は小さな入り江になっていて、入り口の方は短い堤防があり、その反対側は小高い山を持った岬がせり出している

その岬の付け根に少し広い山道があり、反対側の海に抜けている、その山道を二人は並んで歩く。

「昨日の晩は寝たとね」
「うん」
その後は話が続かなかった。
山道を抜けるとちょっとした峠になっていて、その向こうには海が広がっていた。
驚くほどに透明の海が夏の太陽に照らされて、海の中までも見える。
海の中の微かな「揺らぎ」が、柔らかい反射光を放っている。
村側の玉石の浜と違ってこちらは「砂利浜」になっていて、海岸に打ち寄せる波が白い泡になって砂利に吸収されて行き、沖合に帰ることは無い。
「寄せては返す、、」と言う表現じゃなく「寄せては消える、、」と言った感じである。
「ザーッ、ザーッ、、」と砂利浜独特のゆったりとした音が続いていた。
この自然豊からな島の中にもより美しい海岸があり、村の子供たちは泳ぐときは決まってそっちの海岸に行く。
こんな田舎でも年に数人の観光客らしき人達がやって来る、その人達はバス通りから見える目の前の入り江の海の美しさに驚嘆して、喜んで入り江で泳ぐ。
入り江は生活の海だから、下水なども流れ込むし、船の油も少なからず漂っている。

都会からの来訪者は、そんな海でも感動してしまうらしい。
バス通りを離れて２０分も歩けば、此処よりはるかに綺麗な海があるとは思わないみたいだ。
勿論村の子供たちも小学校の低学年ぐらいまでは家の近くの入り江で泳ぐことの方が多い。
それは、浜で仕事中の大人たちの目の届くところで安全に遊んでいると言う事で、
高学年になると独り立ちして山向こうの「大人の海岸」で泳ぐことが許される。
これは村の子供たちの暗黙の了解でもあった、
それが中学生ぐらいになると、また違う所での泳ぎが認められる。
流れが速く、瀬がありかなり危険な海岸での「漁」が許される。それは一人前の証でもある。

二人は日陰になっている岩場を探して荷物を置いて座った。足を延ばすと海がそこまで来ている。

「ここならゆっくりできるね」

と恵理子は微笑みながら言う、海からしか見ることの出来ないこの場所が気に入ったみたいだった。

治は適当に座るとタバコを吸いだした、恵理子もその横に座った。

目の前は水平線しか見えない海だった。

透影（すきかげ）

恵理子が大好きだった母親は小学5年生の時に死んだ、
しばらくは父親が炊事もやっていたが中学1年頃から恵理子がやるようになった。
最初は弟2人から「不味い」と言われて良く喧嘩したが、その度に父親が兄弟を宥めて
「いつも仲良くしなければだめだ」と教えてくれる、優しい父親だった。

今朝は家族の朝ごはんを作る時に、治とのデート用のお弁当も作った。
何時もより、腕によりをかけて作ったものだから弟達は
「ねぇちゃん、すごかねーごちそうたい」と喜び
卵焼きや、魚肉ソーセジを油で炒めただけの物を、とても美味しそうに食べてくれた。
恵理子は弟達が可愛くて仕方ない、特に高校に入ってからはまるで母親のように良く世話をした、
弟二人も姉に言われたことは良く聞く良い子になっていた。
母親はいないが幸せな家庭であることを恵理子は、教会に行くと必ずマリア様に感謝した。
恵理子も信仰心深い隠れキリシタンの末裔である。

二人が探し出したこの場所は丁度日陰になっていて、海からの風が気持ち良かった。

恵理子は持ってきた網のバッグから、昨夜から冷凍させた麦茶と、朝作った弁当とを出した。
最後にカセットテープレコーダーを取り出して、スイッチを押した。

『あなたがいつか　話してくれた
岬を僕は　たずねて来た
二人で行くと　約束したが
今ではそれも　かなわないこと

岬めぐりの　バスは走る
窓に広がる　青い海よ
悲しみ深く　胸に沈めたら
この旅終えて　街に帰ろう』

静かな海に歌声が流れる、２人は何も喋らすに海を見ていた。

治は聞きながら、考えていた。

「これが、彼女と言うもの？付き合うと言う事？」
「自分は恵理子が好きなのか？」

確かに恵理子は可愛いと思う、それ以上に自分の事を好きだと言ってくれた、
だから「付き合おう」と言われた時に良いよと言った。
それは、適当な気持ちなのかと言うとそうではない、昨夜二人で夜の海を見ていると、
変な気持ちだった、なんとなく落ち着くそれでいてドキドキする気持ちが有った。

中学時代でも好きな子はいたが「付き合う」と言う感覚は無かった、
勿論今でも「付き合う」と言う意味はよく理解できていないと自分でも思う。
正直な話「彼女」と言う感覚すら良く分かっていない、彼女と好き

な人と友達の区別が何なのかすら分からないが、
高校生になった途端に、彼女とか付き合うとか言う単語を良く耳にする。
付き合うとは一体なんなのか、好きな女友達とどこが違うのかが分からない。

でも、今こうして恵理子と二人で海に来ていると、中学時代には感じれなかった「感じ」がある。
京子の事は今でも好きだが、多分今は恵理子の方が好きなのかもしれない自分がいる。
昨日の夕方初めて会った時も、みんなで飲んでいる時も、2人で堤防まで行った時も「好き」だと言う感覚は無かった。
それが、恵理子が足元のロープに躓き腕にしがみついて来た時に微かに触れた恵理子の胸の膨らみを感じた時に何かが変わった。

中学3年生になる頃に、ヒロちんが学校に持ってきた週刊誌をみんなでこっそり見た、そこには女性の裸の写真が有った。
治は「すごかね」と口では言いながら、頭は写真にくぎ付けだった。
別に女性の体を知らない訳ではないが、感じる物が何か違ったのだ。
それからは、性に目覚める事が「悪い事」をしている感覚がありながらも、深夜放送のラジオ番組のエッチな話をボリュームを下げてこっそり聞いたり、大人の週刊誌を借りて来て布団にもぐって懐中電気で見たりもしていた。

しかし、それはあくまでも「大人の世界」の事であって自分には関係の無い世界。

昨夜まではそう思っていた。恵理子の胸を感じるまではそう思っていた。

「触ってみたい」そう言う思いがあった。
中学の頃に面白がって女生徒の胸を触っていた思いとは違う何かが有った。

「付き合う」と言う事はそれに向かう第一歩なのかも、そうも思う。
実際、今横に座って音楽を聴いている恵理子の、白いＴシャツのはち切れそうな胸にも手を伸ばせば触ることができそうだった。

なんとなくモヤモヤした自分に気が付かれそうで、

「泳ごか」と言うとシャツだけ脱いで、ジーパンのまま海に飛び込んだ。
海水の冷たさが、モヤモヤした気持ちを吹き飛ばした気がする。

「海パン持ってきちょらんとね」と恵理子が叫ぶ「うん」と答えると、クスッと笑って白い短パンを脱いで海に飛び込んできた。

二人の目の前の海は浜の端の方で、岩場になっていたのですぐ目の前でも３メーターの深さはある。
勿論海底まで見えるほどの透明な海だから、飛び込むことに恐怖は無い。

足から飛び込んだ恵理子が海面から顔を出して「ふぅー」と息をつき髪をかき上げ
「気持ん良かね」と治の近くに寄ってくる、二人の距離が縮まるそれも海面に出ている顔だけが近づいてくる。
治はなんとなく恥ずかしくなって、
「向こうに行くばい」と言うと２０メータほど沖合の「瀬」に向かって泳ぎだした。
「１５待ってよ」と言う恵理子の声がする、

海面から出ている「瀬」に着くと治は腰ぐらいの深さの所に座った、恵理子が顔だけ出して泳いでくるのを見ていた。
後2メーターぐらいの所で「ひどかね、先に行くちゃ」と拗ねたように言う。

2人で瀬に座った、恵理子はまだ息を切らしている、
白いTシャツが濡れて青い水着が映っていた、腰から先は海の中だが白い足が良く見えた、水着の青も水の中で揺れていた。

まるで、お風呂にでも入っているみたいに二人で腰まで海に浸かっている。
「15ちゃ、頭良かとやろ」と恵理子が聞く。
「そがん事なかよ」と治が答える
「ばってん、この前のテストや1番やったろう」
「そうばってんが、そがん事大したことじゃなかばい」
「かっこよかたい」と恵理子は笑う。

治にしてみれば、不思議だった。

これまで、何も知らない奴に同じような事を言われるのがとても嫌だった、だからそんな事を言われても返事すらしなかった。

でも今恵理子に「かっこよかたい」と言われるのは何故か嬉しく感じる。
「どがんして、おっが事ば、しいちょっと」と治は聞いてみた。
恵理子は治の顔見て、
「どがんしてって、好きやけんさ」
そう言って微笑んで「15やどがんして私と付き合うとね」と聞いてくる。

「どがんしてって、よう分からんばい」
「分からんばってん、付き合いたかとさ」
恵理子はただ笑っていた。
沖合の瀬に座る二人の周りの海はたぶん深さ5メーターはあると思う、
既に頭上に来ている太陽が海の底まで光を届ける、そこには大小の魚たちが気持ちよさそうに泳いでいる。

「お腹空かんね」と恵理子が治の顔を覗きながら言う。
「すこし」
「今日私お弁当作って来たとよ」と今度は首を傾げてにっこり笑った「すごかやろ」と治に言う。
「うん、すごか」
「戻って食べようか」と恵理子が言う
「うん」

「じゃぁー行くばい」と言って治は瀬に立ち上がる、恵理子は治の腕につかまって立ち上がると、
治を海に突き落とした、治が海中から顔を出すと恵理子は声を上げて笑ていた、治も笑った。

恵理子も続いて飛び込んで海面から顔を出したら治の姿が見えない、ふと足元を見ると海中に治が揺らいで見える
その直後海中に引きずり込まれてしまう、恵理子は必死で治にしがみついた。
海中で二人は抱き合う形になってしまう。

抱き合ったままで海面に出ると恵理子は笑う、笑いながら、

「ひどかね」と治の耳元で甘えた声で言う。

治は恵理子の胸の膨らみを自分の胸に感じていた。

透き通った海の底には、抱き合った二人の小さな影がくっきりと映っていた、、

まるで透影のように。

寝顔

寝れた体をバスタオルで拭いてる恵理子の後姿を治は見ていた。
すらりと伸びた足、ふっくらとしたお尻が青い水着に隠れている。
バスタオルで水分を取られた長い髪は、まるでお風呂上がりのようになっていた。

先ほどの余韻が残っているのか、それともこの数分で「大人」になったのかは分からないが、
水着の後ろ姿を、目をそらすことなくじっと見つめている、恥ずかしいと言う感覚が無くなっている自分に気が付いた。

その自分の目線は、週刊誌の写真を見る時の気持ちと少し違う事にも気がついていた。

2人が今いる場所は、岩場の少しくぼんだ所。洞窟とまでいかないが、日差しは入ってこない。
海の傍に立ってバスタオルで体を拭く恵理子とその向こうに見える夏の日差しと青い海が一枚の写真のように治の目には写っている。

「はいこれ」と言って治にお弁当を少し恥ずかしそうに差し出して微笑んだ。それと、半分凍った麦茶。
一口飲むとても冷たくて美味しい。
「ちんたかけん、うまかね」
「やろー昨日の晩から凍らせたとよ」と治の手からポットを受け取ると恵理子も一口飲んだ。
「関節キッスやね」と悪戯っぽい目で言う。

結局治が弁当の殆どを食べた、恵理子は自分はあまり食べずにただ

黙って見ていた。

食べ終わったら、治はそのまま横になって寝てしまった。
恵理子はさっきから流れていたカセットテープレコーダーのボリュウムを少し下げて、
すでに、寝息を立てて横で寝ている一つ年下の治を見ていた。

この人が私の初めての彼なんだわ、そう思うととても嬉しく思う。
これまで一度や二度なら告白されたことはある、でも自分から告白したのは初めての事。

報復事件があるまで、恵理子は治の事を知らなかった、「秀才」が入学してくることはなんとなく聞いた事が有ったが。
特に興味は無かった「自分とは違う世界の話」と思っていたから。
そしてあの報復事件を起こしたのが「伊藤治」だと知ってびっくりした。
頭の良い人は「メガネをかけて」「真面目そうで」「気弱」と言うイメージだったのに、
この彼は違った、「色黒」で「艶の無い無表情な顔をしていた」とても「秀才」のイメージからほど遠い。
その年下の1年生を初めて見た時に恵理子は何故か惹かれた。

そして昨夜海岸に彼はいた、思わず「伊藤君だよね」と聞いてしまう程、教室で見た彼とは別人だった。

明るい笑顔、朝などは村の子と同じで漁の手伝いをしたり、別世界の人種かと思っていたけど何も変わらない。
ただ時折見せる寂しげな顔が恵理子には気になった。

でも今横で寝ている彼は、2年生、、いや高校の皆が知っているあ

る意味人気者、
好意を寄せてる女性も多分大勢いる。実際自分のクラスにもこの彼を好きだと言っている友達が数人いるぐらいだから。
そんな人と二人で泳ぎに来て、お弁当食べてくれて、さっきは海の中で抱き合った。
それが妙に嬉しいような、誇らしいような気がする。
「この人が私の初めての彼なんだわ・・」
治の寝顔を横に座り恵理子は見ていた。

知らぬ間に乾いてしまった恵理子の長い髪が、サラサラと風に揺れている。初夏の海だった。

翌日の朝、いつもの慌ただしい朝が終わりセーラー服に着替えて浜の入り口のバス停に行ったら、
すでに皆待っていた、勿論彼の顔も見える。
昨日の夕方海からの帰りに月曜の朝帰る事は聞いてたから、驚きはしなかったが、胸はときめいた。

「おはよう」と言って横に立つと「おはよう」と彼が顔を見て言ってくれたのが嬉しい。

この村の高校生は、男子が一人女子が3人の4人だけ、その3人の目が「恵理子、伊藤君と付き合うんだって？やったね！嬉しいだろう」と言っているように感じて少し恥ずかしかった。

朝のバスは、大人達も学生もお年寄りもみんなが利用するから混んでいる。

座る席がなくセーラ服の恵理子とジーパン姿の治は並んで立った。
「ジーパン乾いたと」
「うんにゃ、まだ少し濡れちょっけん気持ちん悪かよ」と治が言うから
「どら」と言ってジーパンのお尻の所を恵理子は触ってみる、少し湿っていたので、
「ほんなこち、濡れちょっね」と言ってクスッと笑った。
「今日学校終わったら下宿に遊びに行っても良かね」
「うん、良かよ」
恵理子は鞄からノートを出して治に下宿の地図を書いてもらった。

治は学校のひとつ前のバス停で降りて行く。

恵理子は、放課後の事を考えて嬉しくなっていた。

林檎

その日の放課後、治とヒロちんはいつものように通学路を歩いていたらヒロちんが、

「15今日これから、彼女ん来っとね」
「うん、そがん言いよったけんね、来るっちゃなかとかな」
「おっや部屋に、いても良かとね」
「うん、良かさ」
「邪魔じゃなかと」
「うんにゃ全然よかよ」

途中でジュースを買って下宿に戻った。

部屋に着くと、ヒロちんは掃除をしだした、治は畳んである布団に寝転んで煙草を吸いながら
「ヒロちん、良かばい別に掃除せんでん」
「かっこ悪かろが」
「そがんかね」
「うん、少しやしちょっけん」
「悪かね」
「別に良かよ」とヒロちんは笑った。

「15どがんな感じね、彼女ん出来るっち、、」
「どがんち」
「嬉しかとね」
「そうやな〜」
「もうキスやしたとね」と掃除をやめてヒロちんが照れくさそうに聞いた。

「うんにゃしちょらんよ」
「なんや～昨日の昼したとかと思ちょったよ」
「しちょらんよ」
「今日すっとね」

そう言われて今度は治が昨日海岸での事を思い出していた。

手を伸ばせば届きそうな恵理子の胸のふくらみ、自分の胸に感じたあのふくらみ。
抱き合った時に匂った恵理子の息遣い。
耳元に有った恵理子の唇。

あの時胸のふくらみに手を伸ばしたら、恵理子は嫌がっただろうか。
あの時キス出来たのかも知れない、恵理子は嫌がっただろうか。

そう考えていると、治は「体が熱く」なって来るのを感じて、慌てて煙草を吸った。

「よかなぁおっも彼女んほしかよー」と煙草をくわえたまま寝転んでヒロちんが言う。
「すぐ、でくっちゃん」
「そがんかなぁ」
「そがんさ、ヒロちんや好きなおなごやおらんとか」
「おらんばい、恥ずかしかもん」
「恥ずかしゅなかたいね」
「そがんかね～」煙草の煙を天井に向けて勢いよく吐き出しながらヒロちんは言う。

その時階下の玄関が開く音がして「こんにちわー」と恵理子の声がする。

「15来たばい」ヒロちんが飛び起きて、まるで自分の彼女が来たみたいに、そさくさと下がって行った。

「おじゃますまーーす」
おどけた感じで恵理子は言いながら階段を上がってきた。
治は畳んだ布団に寝転んだままで
「すぐわかったと」と恵理子に聞いた。
「うんわかったよ」

夏用の白いブラウス姿の恵理子が笑顔で上がってきた。
織り目がしっかりついた黒いスカートから出ている細い足が、治には妙に艶めかしく感じる。
紺のタイを結んだふくよかな胸元、長い髪は後ろで結んでいた。
九州の女性にしては珍しい色白な顔にピンクの唇が眩しい。

「何じろじろ見てるのよ、恥ずかしい」と言いながら恵理子は治の横に座った。

「綺麗に片付いてるね」
「あぁこれヒロちんが今掃除したけんね」
「ヒロちんがしたとね、15やせんやったと」とヒロちんに聞いた。

ヒロちんは顔を真っ赤にして「うん」とだけ答えて、さっき買っておいたリンゴジュースを恵理子に手渡す。
恵理子が「ありがとう」と言うとまた、少し照れ笑いをヒロちんはした。

治はヒロちんも多分恵理子に大人の女性を感じて照れたのだと思った。

「おっやテスト勉強ば下でしてくっけん」と言うとヒロちんは鞄を持って階段を下がって行った。

部屋に二人っきりになると恵理子が

「ヒロちん別に遠慮せんでも良かとにね」と治のほうを見て笑う

恵理子はリンゴジュースを飲みながら窓際に行って、

「海が綺麗に見えるとね」と独り言みたいに呟く。

窓辺に腰かけた恵理子の白いブラウスが夕日で透けて見えた。

「今週の金曜にテスト終わるから、土曜日また遊びに来んね」

「うんよかよ」

「１５や、今度のテストでも一番ば取るとね」

「分からんばい」

「私１５が一番なら嬉しいなぁー」

治は不思議なことに今日も成績の話をされても、腹立たしくならなかった。

今までなら、こんな話を誰にされても腹立たしさを感じていたのだが。

今こうして恵理子に「一番になって欲しい」と言われて逆に自分自身が嬉しさを感じている。

恵理子と出会った事で、治の中で何かが変わり始めていた。

これまでも自分の能力を、理解している友人は確かにいた、しかし

その友人達は皆

「過去の努力」を知った上での理解だった。

しかし恵理子は過去のことなど知らない、知らなくて今の自分だけを評価している。

これが高校の先生相手なら間違いなくイラつく、でも恵理子の言葉にはイラつかない。

それは何故か、これまでの人たちの言葉の中に治自身は「妬み」や「興味本位」

学校の先生たちなどは「自分の腕の中に入れて自分の手柄にしよう」みたいな下心さえも感じていた。

でも恵理子の言葉に治はある感情を始めて感じた、それは、、

「期待」である。

「期待」と言う感情を治は知り合って間もない他人から感じたことに少なからずびっくりしていた。

今まで「期待」と言うものは、

自分が、これまでに「何をしてきて」これから「何を求めて」また「何をしたいのか」を理解していない人が「期待」など出来ないと思っていた。

もしも、その様な事を一切知ることもなく「期待」などと言われたらそれはおそらく

「似非」

「偽物」で「内容の無い」ただ「口先だけ」の「侮蔑」するべき言

葉だと治は感じていた。

「どがんして、ワシが一番なら恵理子が嬉しかとね」と治は聞いてみた。

「かっこん良かたい！」と恵理子は窓に腰かけたまま言った。

これまでの周りの人たちは、自分の進む方向を自分の意志など関係なく「強制」してくる。
それもその方向に自分が進んだとしてもその「強制」した人たちが嬉しいわけでもなんでもない。
ただ「普通はこうだ」とか「成績が良いならこう進むべきだ」とかだけで、進むべき方向を強制したがる。
強制するといっても、前に立って「手招きしてくれるわけでもなく」横道にそれたら駄目だとしか言わない、
「こっちに入ってはいけない」と言うが如く側面に壁を作って決して自分の前に立とうとはしてくれなかった。

だが今恵理子は自分の前に立って、「一番を取って欲しい」と求めている。
それは治自身の将来とか、一般論とかじゃなく。

単純に恵理子本人が嬉しいからと言う。

そんな感じで言われたことが治はなかったからとても新鮮だったし、不思議でもあった。

「うん分かったよ一番とるばい」と治は答えた。

「ほんと、嬉しい絶対ばい」そう言いながら寝転んでいる治の横に

座った。

「取れんやったら、ごめんね」治がそう言うと。

「学校始まって以来の秀才の１５がもしかして自信なかと」と治の顔を覗き込んだ。

恵理子の顔が寝転んでいる治の目の前に有った。

「そがん訳じゃなかばってんさ」

「なかばってん、、何ね」と治の顔を真上から覗き込んだままで恵理子が悪戯っぽく聞いた。

後ろでまとめてある長い髪が首筋から落ちてきて、頭の後ろで手を組んで寝転んでいる治の顔にくっつきそうになっている。

わずか３０センチも離れてない距離で目と目が合った。

恵理子の黒い大きな目を治は恥ずかしいとも思わずにじっと見ている、少しの沈黙の後に。

恵理子が「一番になれるようにおまじないかけてあげるね」と言って。

治の唇に自分の唇を重ねた。

治は恵理子の柔らかい唇の感触を自分の唇に感じた。

重ねた唇をほんの少しだけ外して「これで大丈夫ね」と言った恵理子の吐息はリンゴジュースの匂いだった。

「うん」

治が答えると、恵理子は微笑んで静かに目を閉じるともう一度唇を重ねる。

夕日のオレンジ色で染まった部屋で二人は長いキスをする、治も恵理子も重ねただけの唇からお互いの鼓動を感じた、初夏の夕方。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3971x/

君、真夜中の橋を渡れ。（第２部）

2011年11月11日13時47分発行